

ブラインドアスリートの発掘と育成に関する現状と課題 筑波大学ブラインドパラスポーツ・ミーティング

宮本俊和

(筑波大学 理療科教員養成施設)

河合純一

(日本パラリンピアンズ協会)

齊藤まゆみ

(筑波大学)

はじめに

東京2020パラリンピック競技大会に向けて、わが国におけるパラスポーツもこれまで以上に競技力向上が求められるようになり、パラリンピアンの実状と課題がにわかにクローズアップされるようになった。そこで国内において実施されたさまざまな調査研究を通して得られた知見を共有し、課題解決の方向性を検討すべく、日本財団パラリンピック研究会の紀要に情報提供をさせていただくことになった。本稿は、パラスポーツの中でも「ブラインド」に特化し、障害特性から種目横断的な課題解決を目指している、筑波大学ブラインドパラスポーツ・ミーティングから現状と課題について報告するものである。筑波大学は、多くのパラリンピアンとその指導者を輩出しており、とりわけ理療科教員養成施設や附属視覚特別支援学校からは、視覚障害のあるパラリンピアンが継続して誕生している。

2014年3月に開催した「パラリンピックの競技支援：視覚障害スポーツの競技支援と鍼灸マッサージ」というテーマのシンポジウムから、関係者間の情報共有、連携が重要であるという1つの結論が導き出された。それを受けて、同年4月から毎月1回、ブラインドパラスポーツ関係者が集まり、各競技の勉強や情報交換を実施してきた。また、日常的にもメール等を通じて情報共有を行ってきた中でブラインドスポーツに共通する課題が明らかになってきた。とりわけ、ブラインドアスリートの発掘、育成における課題と解決への道筋の共有が急務であると捉え、東京パラリンピックを5年後に控えたタ

イミングで実施するシンポジウムのテーマとして、ブラインドアスリート（本稿では、ロービジョン／弱視競技者も含める）のタレント発掘と育成について取り上げることとした。以下は、2015年3月8日、筑波大学で行われたブラインドパラスポーツシンポジウム2015「ブラインドアスリートの発掘と育成」の要約である。なお、本稿では「盲学校（特別支援学校）」は通称として現在も教育現場で使用されていることから、固有名詞以外は発言者の用いた用語をそのまま使用することとした。

1. シンポジウムでの各報告の要点

(1) 視覚障害クラス分けの意義と方法

西田朋美（国立障害者リハビリテーションセンター病院 第二診療部眼科
医長，IPC/IBSA 視覚国際クラス分け委員）

- ・日本の眼科では、一般的にゴールドマン視野検査の実施時に「Ⅲ/4e（イソプタ：見える視標の光の強度およびサイズ）」は測定しないが、「Ⅲ/4e」はクラス分けの時に視野の範囲を決めるのに必要なため、視野検査の際は眼科医に伝えることが重要である。
- ・医学的診断書（Medical Diagnostics Form [MDF]）は国際クラス分けを受ける際に必須で、少なくとも競技大会が行われる2、3ヶ月前には準備しておいた方がよい。国際クラス分け委員はさまざまな国から来るので英語での記載が必要となる。日本語でのメモは英訳しておき、コピーを持参する。
- ・身体障害者手帳の視覚障害の基準と国際クラス分けの視覚障害の基準は全く違う。身体障害者手帳2級でも網膜色素変性症で視野障害だけの場合、国際クラス分け基準に照らし合わせると「不適格」：NE（Not Eligible）になる。たとえクラス分けを受けるアスリートが身体障害者手帳を持っているとしても、もしくは現在盲（特別支援）学校に通っているとしても確認が必要である。

(2) 地域から世界へ：ナショナルタレント発掘・育成の仕組みとブラインドアスリートへの応用

衣笠泰介（独立行政法人日本スポーツ振興センター，2020年ターゲットエイジ育成・強化プロジェクトタレント発掘・育成コンソーシアム・ディレクター）

- ・世界のトップアスリートやオリンピック選手の心理的・生理的・社会的特徴を研究し、科学的な視点を取り入れて、求めるタレント像をビジョンとして明確に持つことが重要である。世界各国ではタレント発掘の際に何を測定しているのかなど、測定項目の情報収集を行い、それをもとに日本人に適したものを作成していく必要がある。
- ・タレント発掘で最も難しい点は、発掘した後にいかに育成につなげ、またその育成をどう実施するかである。そのためにコーチ、大会、アスリートライフスタイル、科学的支援、施設、トレーニングパートナー、ライバルなどにおいてワールドクラスの育成環境を提供することが求められる。
- ・ブラインドアスリートのメダル獲得に関するデータを分析すると、平均28歳でメダル獲得のピーク年齢を迎えており、メダリスト最高年齢は40歳以上（例：陸上競技短距離男子48歳）である。ターゲットとする年齢、育成期間を再考する必要がある。
- ・一番の障壁はクラス分けで、クラス分けをしないと発掘できないという課題がある。発掘したのはよいが、クラスごとの基準値がないためどの程度の選手なのかを見極めるのが難しい。日本人のデータを集めていく必要がある。
- ・メダルポテンシャルアスリートを増やしていく方法は2つあり、1つは、下からの層を積み上げていくこと。もう1つは、別の種目の選手を転向させて増やすこと。要するに、いかにその競技人口を増やすかである。他種目への適性がある選手がいれば、種目を転向させてメダル獲得の可能性を高めていくことができる。

(3) ブラインドアスリートの育成

木村敬一（東京ガス、日本大学大学院、パラリンピック水泳メダリスト）

- ・近年、普通学校に通う視覚障害児が増えていると言われている。そういった児童生徒が小学校や中学校でスポーツをするということは、思っている以上に障壁がある。例えば、体育の授業で他の児童生徒と同等にスポーツをすることは出来ない。そのため、スポーツを苦痛に感じているのではないか。
- ・弱視の場合、授業や基本的な学校生活は他の児童生徒と同等に送ることが出来るが、障害者スポーツをやった瞬間に自身が障害者であることを認めざるを得なくなる。それが、障害者スポーツに取り組むことの障壁の一つである。
- ・ブラインドスポーツを普及させる側が、上記のような障害者スポーツを行うことに対する心理的障壁の存在を理解し、その上で、障害の受容、ロールモデルの存在、競技そのものの魅力を発信していく必要がある。

(4) ブラインドアスリートの育成について—自身の経験から—

原田清生（筑波大学附属視覚特別支援学校，NPO 法人日本盲人マラソン協会 理事）

- ・ 3,192人（全国の盲学校在籍児童生徒数：全国盲学校長会調査2014年）のような少人数の中から日本代表を何人も出さなければいけないという厳しい状況にあるため，中途障害者も含めて選手の発掘を行っていく必要がある。したがって，眼科医との連携が必須である。
- ・ 盲学校の指導者の課題として，競技そのもの，また指導法について大学で教えられていないことが挙げられる。学びたくても研修の機会，学ぶ場がないという問題もある。
- ・ 2014年4月現在，盲学校は全国で67校，そのうち35校は1県につき1校である。指導者が競技を理解し指導のノウハウを得ても，盲学校以外の学校へ異動する県が35県ある。異動によって，視覚障害者スポーツとの関係が途切れるという実態がある。
- ・ 盲学校，競技団体，眼科関係者間の連携が薄い。例えば，クラス分けについて知らない盲学校関係者は多い。ロービジョンの生徒はパラリンピック対象者にならない場合があることを知らない指導者も少なくない。

3. 総合討論

(1) 視力・眼科医に関する議論

Q：中途視覚障害者はどのような年齢層が多いか？

A：圧倒的に中高年以上が多い。眼科医などが，40代でもメダルが獲得できるという情報を提供する必要があるだろうが，情報が行き渡っていないと強く感じる。（西田）

Q：どのようなところから情報を得るのがよいか？

A：中途視覚障害者の場合は盲学校との接点は当然ないので，病院が必然的に重要な情報源となるだろう。（木村）

Q：眼疾の種類によって，スポーツへの取り組みにくさは違うのか？

A：手術を必要としない眼疾患であれば取り組みやすいのではないかと。例えば，網膜色素変性症やレーベル病など。（西田）

※追加コメント

眼科医に視覚障害者スポーツに関するアンケートを実施した（非公式データ）。その結果、患者に勧めたいがエビデンスがない、もしあれば知りたいという声があった。（西田）

(2) タレント発掘に関する議論

Q：中高生に対してのアプローチの難しさを感じているが、中高生本人からすると、障害者スポーツやパラリンピックスポーツへの取り組みにくさとはどのようなものか？

A：生徒は、生徒会やその他の活動、自立活動（歩行訓練や生活訓練など）を行っており非常に忙しい。また、盲学校は小学部から高等部専攻科まであり、グラウンドや体育館を大勢で共同利用している。また、寄宿舎で生活しているため、週末には帰省しなくてはならないという課題がある。地域でのサポートがなければスポーツに親しみをもちにくい状況があるだろう。（原田）

Q：身体障害者手帳を持っていない、あるいは普通学校に通っているが、パラリンピックに出場できる基準のタレントが全国にいるのでは？

A：実際にそのようなタレントは存在する。例えば、高校駅伝を経験しており、ある程度の記録を持っている中途失明の選手がいる。視覚障害スポーツの世界に入ったら日本代表として世界でメダルが狙えるかもしれない。そういった人々に、パラリンピックの魅力をいかに伝えるかが重要である。さらに、就職、経済的基盤などの問題もついてくるので「受け皿」の整備が必須である。（西田）

Q：タレント発掘に関して中高生に目が向きがちだが、大学生やそれ以上の年齢層へのアプローチも有効なのは？

A：30代の選手でもメダルは目指せるが、東京2020大会でそういった選手が辞めてしまっただけでは未来に繋がらない。そのため、若いタレントも非常に重要である。（木村）

Q：日本ブラインドサッカー協会では、視覚障害児の発掘ということでキッズキャンプ事業を行っている。こうした子供たちの可能性を広げていくために、競技団体との連携等どのような取り組みが考えられるか？

A：日本パラリンピック委員会（JPC）あるいは日本障がい者スポーツ協会の中に「視覚障害者部門」が設けられると良いが、なかなか実現化が難しい。現在は、毎年1度視覚障害者スポーツ競技団体情報交換会を実施している。各競技団体が横の繋がりを密に取っていく必要がある。（原田）

※コメント

タレント発掘にあたっては、いろいろなアクセスポイントを作るのが望ましい。そのときに選手本人や家族を説得するために、環境（指導者、経済的基盤、育成環境など）の整備とセカンドキャリアに繋がるという持続的な視点を提供できることが重要となる。（宮本）

(3) 競技者および指導者の育成に関する議論

Q：指導者（盲学校教員）の立場から育成の現状について。

A：選手育成の大変さというのは、常に一緒にいること。そのため、時間が足りない。より多くの時間を共有してトレーニングに取り組む必要がある。（盲学校教員A）

A：伴走者をお願いしたり、練習場まで連れて行ったり、練習を一緒にしたり、一緒に帰って来たりする必要があるため、やはり時間がない。指導者は専門性も必要である。（原田）

A：練習時間や勉強時間の両立もあり、時間の制限がある。（盲学校教員B）

A：東京都は6年ごとに人事異動があるため、スポーツの魅力をもたせる指導法を引き継ぐことが難しい。（盲学校教員C）

Q：盲学校の教員の異動や指導法の引き継ぎといった課題がある中で、どのように指導方法を普及させるか？

A：育成の鍵はコーチである。いいタレントがいても、いい指導者がいないとメダルには繋がらない。競技によって、いい指導者（オリンピックやパラリンピアンを多く育てている先生）がどういう指導者なのかを把握する必要がある。JISSでは10年かけてオリンピック競技のナショナルチームのデータを収集した。パラリンピックも同様にデータを蓄積していくことが重要だ。タレント発掘には、まず「いい指導者」が必要、そして「育成環境の整備」が重要で、それらが整ってから、ようやくタレント発掘ができる。（衣笠）

Q：障害者スポーツの種目を体育の学習指導要領に含めることについて。

A：学習指導要領にアダプテッド・スポーツを含めることに関連して、保健体育の教員免許をとる課程でアダプテッド・スポーツ関連教科を必修とすべき、ということについても日本体育学会のアダプテッド・スポーツ科学専門領域で議論している。（大学教員）

A：理療科でも競技支援を通して選手と触れ合う機会を作りたい。眼科関連の授業などでクラス分けを学んだり、パラリンピックの出場選手が理療科の教員であったりもするので、講義などを通して選手と接しながらやっていきたい。指導者育成に関しては、国・学校レベルで教育プログラムを根本的に変える必要がある。（宮

本)

Q：アスリートライフスタイルについて。

A：アスリートをいろいろな観点から包括的に育てていくという試みがある。スポーツだけに注力するのではなく、例えば、コミュニケーション能力やメディアに対する対処の仕方、自己管理という視点での料理や身だしなみ等を主体的に出来るよう習慣化していくことである。(衣笠)

A：今後、パラリンピック選手のメディア露出が増えていくことは願うところではあるが、それが増えるということは、メディアへの適切な対応力が求められるということである。次世代の選手には必要な教育だと思う。(木村)

おわりに

本シンポジウムにおいて、ブラインドアスリートの発掘と育成が行われる機会が少ないことが明らかとなった。その解決策として、関係者間の正しい知識の共有と顔が見える形でのネットワーク構築がますます重要となってきている。

また、これまでの方法に捕われることなく、オリンピックでの実践例、諸外国の先進事例を取り入れ進化させていく創造力も必要となってきている。そのような考えを実践するためにも、中央はもちろんのこと、地方にも拠点となる場所がなくてはブラインドアスリートを発掘、育成する機会を生み出すことは難しい。そのような意味で盲学校や眼科を有する病院の存在は大きい。こういったリソースを有機的につなぎ、機能させていく仕組みを構築していく必要がある。

何よりも、指導者なくして一歩も前には進むことができない。改めて指導に当たれる人材の掘り起し、専門的な指導法の継承にも取り組み始める必要がある。今後も諸課題の解決に向け、月1回の勉強会をさらに発展させていきたいと考えている。

Current Status and Issues Concerning the Scouting and Training of Blind Athletes

Toshikazu MIYAMOTO

(University of Tsukuba)

Junichi KAWAI

(Paralympians Association of Japan)

Mayumi SAITO

(University of Tsukuba)

This paper is a summary of the Blind Para-sports Symposium 2015: Scouting and Training Blind Athletes, which was held at the University of Tsukuba on March 8, 2015. The symposium was held to coincide with the lead up to the Tokyo Paralympic Games in 2020, and the author examines the scouting and training of blind athletes (in this paper, blind athletes include athletes with low vision), the theme of the symposium.

Symposiasts Dr. Tomomi Nishida (ophthalmologist and member of the International Classification Committee for the International Paralympic Committee (IPC)/International Blind Sports Federation (IBSA)), Taisuke Kinugasa (Japan Sport Council), Keiichi Kimura (Paralympian) and Kiyotaka Harada (leader and director of a sports organization) discussed the current status and issues regarding the scouting and training of blind athletes and concluded that there are few opportunities for scouting and training blind athletes. As measures to address this situation, they confirmed the importance of sharing accurate knowledge among stakeholders and networking more closely in an open manner.

Rather than adhering to past methods, creativity is required in the development of new methods of scouting and training through adopting methods used for Olympic Games and innovative approaches of other countries. It is also difficult to create

opportunities for scouting and training blind athletes without access to both central and local facilities. In this regard, schools for the blind and hospitals with departments of ophthalmology can play a vital role, and it is necessary to build a framework for organically linking and utilizing these resources. Moreover, leaders are a key element in strengthening capability in sports. Therefore, efforts to find capable leaders and to pass on specialized coaching skills are also essential.